

特集にあたって

妊娠中から，生まれたときから，
常に子どもの成長を見据えた看護を

中新美保子

Nakanii Mihoko

川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科教授

筆者は大学で教鞭をとるようになって18年を迎える。学生に小児看護が担う役割について講義する際は，テキストを用いながら，①人としての尊厳と家族のありようを支える，②子どもの成長・発達を支える，③生涯にわたる健康の基盤づくり，④子どもの苦痛緩和と健康管理，⑤家族の支援¹⁾，の5つのポイントがあげられることを説明している。

しかし，テキストだけの説明では収まらず，“点と線”のたとえを用いながら筆者の思いを話す。残念ながら松本清張の小説の話ではない。

まず，黒色マーカーで白板に点を描き，その点を通りながらスカモンの発育曲線の一般型を意識した，やや右上がりの線を描く。そして次のように説明が続く。以下，筆者の話は「」，筆者の話のなかの患者家族の会話は『』，学生の反応は《》，補足や状況説明は()で表す。

「私が子どもの看護をするときに大切にしていることは，(白板の点をさしながら)今，私の前にいる子どもの苦痛を取り除くことです。子どもが痛みを訴えている姿は本当につらいものがあります。身体的あるいは精神的なすべての痛みにおいて，あらゆる方法を考えて取り除く努力をします。しかし，ここからよ。よく聴いてくださいね！(と，少し大声になる)。子どもは形態的にも心理社会的にも成長・発達をする存在です(その成長・

発達には組織によってさまざまな形がある)。子どもの今だけを考えるのではなく，常に先を見据えた看護を提供することがプロの仕事，最も重要な役割だと考えています」と，伝えたい思いを一気に話す。

《フーンそうか》と真面目に考えている学生もいれば，《何のこと？》と，無反応の学生もいる。「抽象的でわからないのよね，きっと」と，続けて具体的な例を話す。

「例えば，薬理学で学んだ抗てんかん薬(フェニトインなど)は，小児科では長期に服用する場合があります。私が小児病棟に配属されて間もないころ，歯肉が腫れて痛々しく，出血もしている子どもに何人も出会いました。調べてみると副作用の歯肉増殖が現れている状況でした。その副作用をゼロにすることはできませんが，服用を始めた初期の段階から口の中を清潔にし，ブラッシングの習慣をつけて管理することで最小限にすることができることがわかりました。投与を開始したときに，先を考えて，その副作用を最低限に抑えるための方法を具体的に示すことがプロの看護師の看護だと，そのときに小児看護の大切な点を思い知りました。また，こんな出会いもありました」と，もう一つの事例について説明を続ける。

「口唇裂・口蓋裂の7歳の女の子，Aちゃんのお母さんとの話です。Aちゃんは肺炎での入院でしたが，会話が弾むなかで，Aちゃんのお母さんは，『この子が生ま

れてからこの病気(口唇裂・口蓋裂)のためにどれだけ病院に通ったか。その当時は誰も先の見通しを説明してくれる人はいなくて、不安で…。結局、次の子どもを産もうなんて考えることもできなかったのよ』と、語ってくれました。このお母さんの話は今から20年も前のことです。今の看護がこのようだとは思わないでくださいね』と、学生たちが看護に幻滅しないように補足しながら、もう少し続ける。

「お母さんは続けて話されました。『医師は治療の流れはざっとは説明されましたよ。でもね、1回の手術では終わらない病気でしょう。子どもの成長のなかでいろいろな問題が起こるわけですよ。専門の方でしたらおわかりになるでしょう、唇の手術が終われば、次は口の中、言葉の訓練もあるし、矯正もある、鼻をきれいにする手術もしましたよ。次はいつ、何が起こるのか、そのために親や子どもは何を準備しておけばよいか。知りたいんですよね、患者や家族だって。あのときに知っていれば、もっと見通しを立てて準備できたのに。もしかしたら、今の状態よりもっとよくなったかもしれないと思うことがたくさんあるんですよ。傷の状態も言葉も、それにAは内気ですし…』と、これまでの思いを吐露されました。私は、そのお母さんの言葉でハッとしました。涙ぐみながら聞いたと思います。手術後は早く回復して退院してもらうことを役割だと考えていました。そのとき、これではいけないと強く考えましたが、臨床看護師では限界があることも感じて、職場を大学に変えるきっかけになったのです。ですから、ぜひ、皆さんも、点の看護が子どもの成長に生かされ、適切な線になるような小児看護を、大切に思っていたきたいのです』と、長い話を締めくくる。

学生にも話すように、大学に着任してすぐに、この問題を研究のテーマにし、口唇裂・口蓋裂の母親への聞き取りを始めた。口唇裂・口蓋裂の治療は形成外科あるいは口腔外科、矯正歯科あるいは小児歯科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科(言語聴覚士)、看護師などで構成されるチーム医療が基本である。筆者はさまざまな診療科に出向き、実態を知ることから始めた。親の会にも参加した。母親の聞き取りから、産科では超音波画像診断が進歩し、在胎20週前後から病状が判断でき、出生前

診断・告知の問題に直面していることがわかった。告知が事実告知だけで終わったとき、母親は『病名だけ伝えられてもどうしてよいのか。広い海に放り出された思いだった』と、その心情を語ってくれた。

医学の進歩は患者や家族の利益にならなくてはならない。この問題は急いで解決する必要があると考え、産科の医師にも聞き取りをした。幸い、産科の医師も問題意識をもっていたので、解決策を共に考え、治療側の情報を早期に提供するしくみづくりをした。そのなかで、治療側の医師・看護師が出生前に母親と家族に対して、子どもが生まれてからの治療や療育について具体的に説明することが必要であると考え、筆者自ら出向いて実践した(表1)。この試みは、その後の調査によって有用性を確認した²⁾。この支援を書籍として世に送り出し、筆者はAちゃんの母親からの宿題がやっと一段落した思いであった。

本特集は、手術を必要とする先天異常の子どもの看護、なかでも、神経・運動系(骨・関節)の異常が発見され、手術を必要とする子どもの看護を取り上げた。出生前からあるいは生まれてすぐから、何度も繰り返す手術に対して、子どもや母親に工夫しながら対応している看護師や医師、コメディカルの人たちの実践に少しでも役に立てれば幸いである。神経や運動系に焦点を当てたのは、この疾患の治療専門領域が形成外科や整形外科など、一般的な小児科とは異なることから、子どもの入院が小児病棟ではなくそれぞれの診療科であることが考えられるからである。子どもにかかわる多くの臨床看護師が本特集を目にして、子どもの入院が該当の診療科で成人病棟であろうが、小児病棟であろうが、子どもや家族が同じように支援を受けられるように願う。

点が線になる、子どもの成長を支える看護につながることを期待する。

【文 献】

- 1) 奈良間美保, 丸光恵: 小児看護の特徴と理念. 小児看護学概論 小児臨床看護総論(系統看護学講座), 第13版, 医学書院, 東京, 2015, pp 4-7.
- 2) 中新美保子: 出生前告知を受けた母親に対する支援モデルの提案. 出生前告知を受けた口唇裂・口蓋裂児の母親に対する支援モデルの提案と実施・評価, ふくろう出版, 岡山, 2009, pp 28-41.

表1 出生前告知を受けた母親に対する治療側の支援実施表

氏名： 出産予定日： 出産前診断日： 現在の妊娠週数： 担当看護師：

説明内容		医師	看護師	備考	妊婦の反応など
準備	1. 説明方法についての医療者間の話し合い			紹介状などを読み、留意事項について打ち合わせ	家族構成：
	2. 担当看護師を決めた				
	3. 説明場面には担当看護師が同席する				
導入	妊娠の祝福				
	母親および家族の不安について傾聴(共感)			「お話を聞かれてびっくりされましたでしょう」など	
医学的内容の説明	1. 症状説明			状況に応じて写真・絵の使用(有・無)	
	2. 原因について			多因子遺伝。母親の責任ではない	
	3. 外科的手術について説明			手術時期、回数、他の医療チームとの連携など	
				手術後の写真使用(有・無)	
	4. 今後の医療に対するの安心の提供			今日の治療はより正常に近い機能や形態を獲得できることを説明	
5. 育成医療(経済的な補助)について説明	医療的なことは責任をもつので安心してよいことを説明				
養育についての説明	1. 原因に関して母親に責任を感じさせないための支援			医師の説明を理解でき納得しているか、家族間に認識のズレがないか	
				必要があれば祖父母などへの病状説明の検討	
	3. 出産直後の対面について			子育てをするうえでのスキンシップの重要性を説明	
				「出産後お子さんとすぐ会いたいですよね」と質問し、意思を確認しておく→確認がとれれば産科医師と連携する	
	4. 授乳の問題に対する支援			人工口蓋床の説明(有・無)	
授乳は可能であれば、①母乳を直接飲ませる。無理なら、②母乳を搾乳して哺乳びん(軟らかくした普通乳首使用。飲みにくければ穴を2~3個多く開ける)で飲ませる					
5. 親の会について説明	紹介された産科との連携を提案				
継続支援	1. 担当看護師による面談			医師からの情報提供後に面談を行う。また今後の不安への支援を約束	
	2. (希望があれば)経験者から話を聞けることを説明			経験者紹介(有・無)	
	3. 必要であれば遺伝診療科・カウンセリングを紹介				
今後の方針・留意事項など					

(中新美保子：出生前告知を受けた母親に対する支援モデルの提案。出生前告知を受けた口唇裂・口蓋裂児の母親に対する支援モデルの提案と実施・評価。ふくろう出版、岡山、2009、p 40。より引用)